

## 学生の立場から捉える人間科学部の 「学びの良さ」に関する検証

中村卓治

Inspection to relate to “a good point of learning” of department  
of human being science to catch from a situation of a student

Takuji Nakamura

共同研究員（中村ゼミ四年生）

小川 朋美・中井 優華・森永 玲美・小川 弓佳・立野翔子

尾上 梢・丹波 浩美・沖田莉恵子・川本 香奈



### キーワード

学科間交流，人間科学部，育心・育人教育，ソーシャルワーク，グループ力動

### アブストラクト

広島文教女子大学（以下、「本学」とする）人間科学部で過ごす四年間は、学部に所属する学生たちに対し、実際にどのような経験と成長をもたらしているのか。

今回の学科を越えた学生達の交流活動（対談）を通して、利用者の立場から本学人間科学部の価値としての「学びの良さ」について検証を行う。

併せて本交流活動の意義についても、ソーシャルワークの視点に基づいた考察を行い、以下に報告する。

## I 序 論

### 1. 実践研究の動機

大学生生活も後期を残すのみとなった9月下旬、四年中村ゼミ（専門演習2）の最終作業として「人間福祉研究」への報告をめざした実践研究活動を行うことを決めた。活動のテーマについてはゼミ生の自由な発想に任せ、担当教員

は出てきたアイデアをより現実的な形に置き換えて彼女達に提示する作業のみを行った。

ゼミ生達の会議では最終的に、

- ① 四年間の学びにより自己の成長を実感していること
- ② 社会福祉の「専門性」が講義や実習を通して身についたこと
- ③ 同じ学部に所属しながらも他学科の学びの

内容やその専門性についてはほとんど知らないこと

の三点に意見が集約され、それらを満たすための取り組みとして「学生の立場から捉える人間科学部の『学びの良さ』に関する検証」というテーマで実践研究活動が進められることになった。

各学科にはそれぞれ獲得すべき専門性がある。それを獲得するための四年間は、高校を卒業して同時期に入学してきた彼女達にどのような変化や成長をもたらし、どのような専門性の違いを生み出したのか。あるいは学生から見た本学人間科学部で学ぶことの価値とは一体何であるのか。確かにこれらのことは皆が関心を持ちながらも触れてこなかったテーマかもしれない。そこで今回、四年中村ゼミでは、本学人間科学部で学ぶことの価値を「学びの良さ」と位置付け、その事の検証活動を学生生活最後の「取り組みの作業」としたのである。

## 2. 人間科学部とは

本学は複雑化多様化する現代社会の諸問題を解決するためには、人間を中心に据えた「知」の再構成を図ることが不可欠であるという判断のもとに、2000年に文学部から人間科学部に学部名称を変更させている。その作業に伴い、従来からあった初等教育学科に加えて、国文学科・英文学科を人間言語学科・人間文化学科に改組変換し、併せて人間福祉学科を新設した。その後2002年には心理学科及び人間栄養学科を増設して人間科学部に六学科をそろえる体制を完成させるに至った。

諸事情により人間文化学科は2004年度より学生募集を停止させており、今年度の四年生が最終学年となるため、人間科学部六学科体制としては最後の年を迎えることとなっている。

## 3. 研究の目的

現在六学科から構成される人間科学部共通の「学びの良さ」とは何か。あるいは「心を育て、

人を育てる」という教育理念を学生自身がどのように認識しているのか。また、各学科でめざすべき「専門性」や「学問的価値」が、所属する学生たちにどのような実感を伴って伝わり、それがどのような学科固有の「味」を出しているのかについて人間福祉学科の立場から検証する。と同時に、他学科の学問的価値に触れた当学科のゼミ生達がその事をどのように捉え、それをふまえて、人間福祉学科の「学びの良さ」をどのように捉えなおしたのかについても明らかにする。

## 4. 研究の方法と作業の流れ

### (1) 研究の方法

各学科の協力学生に対しインタビューあるいはアンケートを実施し、その内容を元にゼミ生でテーマに対する討議を進めていく。

### (2) 作業の流れ

全ての過程において担当教員はオブザーバー的なかかわりに努め、ゼミ生の主体性を尊重する。

- ①各学科より2～4名の協力学生を募り、学科ごとにゼミ生が対談形式でインタビューを行う。以下はその際の留意点である。
  - ・協力学生はなるべく専攻に偏りが無い様バランスを考慮する。
  - ・基本的姿勢として、協力学生の話を中心にした話しやすい雰囲気作りと傾聴に努める。
  - ・インタビューには原則としてゼミ生全員が出席し、その場の空気や話の流れも含めて共有することに努める。
- ②インタビュー後はふり返り作業とテープ起こしによる内容のまとめ作業、及び協力学生に対するアンケートを実施し、素材作りを行う。
- ③それらの素材を元にして、ゼミ生が本実践研究の目的に即した内容の検討を重ねていく。

## Ⅱ 本論 ～実践研究活動の実際～

本論では、1. 学生が捉える本学の「学びの良さ」とは何か、2. 学科間交流の「意義」とは何かといった二つの視点に基づき、本作業を通して集められる情報をまとめた。

### 1. 学生が捉える本学の「学びの良さ」とは

#### (1) 各学科の「学びの良さ」とは何か

##### 1) 人間言語学科



井上真友子さん、杉本淳美さん、浅岡由貴さん、上田裕子さん

##### ①インタビューのまとめ

人間言語学科の学生は学校生活でもプライベートでも自由で積極的な人が多い。先生も学生も楽しみながら勉学に励むという姿勢なので、講義を楽しみながら受けている。

「人」は皆、相手に自分の意思を伝えて理解を求めたい生き物であると思う。人間言語学科は、人間関係の基本となるコミュニケーションを学ぶことのできる学科である。

「介護等体験」により、障害者観が変わり相手との距離のとり方を考えるようになった。障害児学級は、決して特別な存在などではなく、当たり前のものであると感じることができるようになった。

「その子ができることを伸ばしていく」という教育方針が大切であると実感することができた。

ケント大学への留学を通して、相手の気持ちを考えることや「非言語的コミュニケーション」の大切さを学んだ。我々もそのようなことを生徒に感じさせることのできる先生になりたいと思った。

本学での生活の中でたくさんの人たちに出会い、たくさんの方の考え方や価値観を知った。自分と異なる他者の考え（価値観）を受容することができるようになったことは大きな成長であると思う。

先生の研究室は常にオープンでとても訪ねやすい。研究室の中で後輩や卒業生との交流も行われる。先生と学生との距離はとても近く感じる。そしてしっかりと学生の面倒も見てくれる。私達学生がこうして充実した生活が送れているのも、大学の方針、先生の教育に対する取り組み姿勢が良いからであると実感している。

先生の研究室は常にオープンでとても訪ねやすい。研究室の中で後輩や卒業生との交流も行われる。先生と学生との距離はとても近く感じる。そしてしっかりと学生の面倒も見てくれる。私達学生がこうして充実した生活が送れているのも、大学の方針、先生の教育に対する取り組み姿勢が良いからであると実感している。

##### ②協力学生に対する対談後のアンケートより

- ・他学科とは授業風景が異なっていると感じたし、人間言語学科でよかったと思う。
- ・他学科と比べると、人間言語学科は結構自由であることをあらためて感じた。

##### ③対談によりゼミ生が抱いた印象

- ・学生は個性が豊かで積極的な人が多い。
- ・学生の発言の保障や活動への支援を行いやすい環境が整っている。
- ・学生が他者からの評価をあまり気にしていないし、それぞれの個性を周囲が受容している。
- ・興味範囲が広く、自分の関心事に対して純粋に実践につなげている。

##### 2) 人間文化学科

##### ①インタビューのまとめ

人間文化学科の学生は個々の生活スタイルを大切にしている。書道コースなどは共有する時間も長く仲もよいが、「人それぞれ」といったプライベートな感覚はしっかり持ち合わせている。



石本理恵さん, 岡本 舞さん, 河村朋美さん

人間文化学科と頭に「人間」がつくのは「文化は人間が創造していくもの」であるからという考えに基づかれていると思う。人間文化学科は、「古いものを大切にしながら、新しいものを創っていく学問」である。

卒業制作や作品展に向けて書道や絵画などの作品を生み出す作業は、自分達にとって大変貴重な経験となった。妥協を許さず、最大限自己の内面にあるものを表現していく作業は人としての成長を促すものである。

教育実習を通していかに実技が大切かということも知った。口頭だけでは伝わらないことも多く、生徒に書道の楽しみを実際の作業を通して伝えていくことの有効性を学んだ。

本学科は先生との距離が近い。先生は我々を可愛がってくれ、親身になって育ててくれたし、様々な情報や知識を提供してくれたため、人間文化学科では幅広く勉強することができたと思う。

「大学の良さ」は規模の大きさなどではなく質であると思う。こうした質の良い大学生活を提供してくれる「広島文教女子大学」という大学をもっと世間にアピールすべきであると思う。

## ②協力学生に対する対談後のアンケートより

- ・人間文化学科は現在四年生しかいないこともあり、知られていない事が多いように感じた。

- ・本学科の良さをもっと色々な人に知ってもらいたい。
- ・人間文化学科は一人ひとりがいきいきと個人で考え行動している学科なんだと感じた。
- ・人間文化学科が今年で終わってしまうことはとても残念に思う。日本の文化や将来に関わることを学び、個々人の個性や才能を存分に発揮することができる学科であったということ、残りの学生生活で自分なりに証明していきたいと思う。

## ③対談によりゼミ生が抱いた印象

- ・学生の時点ですでにアーティスト（芸術家）魂を持っている。
- ・学生は自分の内面世界を表現することに徹している。
- ・学生が必要とするものに対し、教員もバックアップしていこうとする姿勢が感じられる。
- ・学生個々の特性やプライベートを、お互いが尊重した人間関係が築かれている。

## 3) 人間栄養学科



坂井佳美さん, 木山幸美さん

## ①インタビューのまとめ

管理栄養士に対する憧れや食べ物に対する関心、又花嫁修業になるのではないかも思いう人間栄養学科へ入学した。勉強はとても大変であったが、同じ目標に向かう仲間がいることで共に励ましあいながら頑張ることがで

きた。

入学当初までは、人間栄養学科では単に「食の栄養」に関して学ぶのだと単純に考えていたが、実際は「人間」を中核に据えた学習を行うのだということがわかり戸惑った時期もあった。しかし勉強や実習を通してこうして管理栄養士に近づくことができ嬉しく思う。

人間を相手にする栄養士として、利用者一人ひとりの背景を考え、その人のことを理解した上で栄養指導は行わなければならないことの必要性を学んだ。

大学の教員というより学校の先生といった方が良くらい学科の教員との距離は近い。また、人間栄養学科の学生は一人ひとり控えめな学生が多く自己主張も少ないかもしれないが、授業や課題への取り組みを通して仲間と共有する時間が長いので、皆仲も良く特に同学年での結束力は固いと思う。

②協力学生に対する対談後のアンケートより  
・あらためて本学の人間栄養学科へ来て良かったと思った。

・「人間栄養学科」は大変というイメージを持たれているけれど、その「大変さ」から逃げていたらここまでの成長はなかったように思う。「大変さ」の中にも仲間との結束や教員の思いやり、友達の存在のありがたさなどいろいろなものが詰まっており、本学の人間栄養学科で経験したことは私たちにとって大きな財産となるであろう。

③対談によりゼミ生が抱いた印象

- ・学生に落ち着いた雰囲気がある。
- ・実験や実習、宿題などいつも忙しそう。
- ・学科のキャラクターとしてはけっして前面に出るタイプではないが、学生同士の仲はよく協調性がある。
- ・傍からみても、教員と学生との距離は近く関係も良好であることがうかがえる。

#### 4) 心理学科



窪園由夏さん、木本明日香さん、平原明日香さん

##### ①インタビューのまとめ

心理学科は人間の行動を調べる実験を行う。又科学的に統計を出す実験も多い。人間を科学するだけでなく、動物も対象にする。心理学科は心の内面を研究する学科であるため、一般企業への就職にもその経験が活かされる場合がある。

心理学科へ入学して様々な角度からの授業を受けて、自分に焦点を当て自己理解を深めることができた。他者に対しても主観的な見方ではなく、多角的な捉え方ができるようになった。トータルコミュニケーション（話すこと、聴く姿勢）を活用できるようになった。

心理学科は教員と学生、あるいは学生同士の距離が近い。「心を育て、人を育てる」という教育理念の通り、温かくすばらしい人たちに出会えたと思う。

講義数にゆとりがあるため、自分の時間を有効に使うことができる。本学主催の世界旅行に行く学友もある。心理学科は、履修の関係でコースによっては自分に興味のある講義が受けられないことがあるので、履修にもう少し融通を利かせてもらえたら嬉しく思う。

心理学科の学生は皆個性的ではあるが、団結力は強いと思う。

②協力学生に対する対談後のアンケートより  
心理学科は心に関することを研究・勉強しているため、内向的な人と外交的な人との差が大きい学科で、皆個性的ではあるが学部生全体に共通する部分と心理学科特有の雰囲気というものがあるように思う。

③対談によりゼミ生が抱いた印象

- ・学生の特長として、表舞台での活躍よりも縁の下の力持ちのイメージを受ける。
- ・スピード勝負のものよりも、じっくりと時間と手間暇をかけて作業をこなしていくイメージを持つ
- ・物事や人間関係に対し、白か黒かではなくグレーゾーンも尊重していくタイプである。
- ・他者に対する思いが強い人が多いように映る。

5) 初等教育学科



田中陽子さん, 川原祥子さん, 宮崎尚子さん, 近藤春奈さん

①インタビューのまとめ

初等教育学科は団結力があり、何をするにも自分たち自身も楽しみたいという人が多い。お祭りなどイベントが大好きで、学生は様々な形の積極性や個性を隠し持っている。教師を目指す人の特質なのかもしれない。

皆同じ目標に向かっていて、お互い励ましあいながら頑張ることができる一方で、教師を目指すという目標から外れることはできないというプレッシャーを感じる時もある。

た。しかしボランティアなどを通して様々な体験をしてみて、結局は子ども達につながっていることに気付くことでがんばることができた。

実習へ行くことにより、自分が抱いていた小学校に対するイメージとの違いや、ボランティアと実習生との立場の違い、あるいは子どもたちに対する自分らしさの表出など、現場でしか気付くことのできない多くの大切なものを得ることができた。

本学は県外各地から学生が集まっていて、出身県によって縦のつながりもできる。また、先生方がとても良い人たちで、我々学生達のことを信じてくれていることが実感できる。

②協力学生に対する対談後のアンケートより

- ・あたりまえのことではあるが、専攻の違いや感じ方の違いで悩みも思いも異なってくるということに不思議な気持ちがあった。
- ・初等教育学科は学内で一番団結力がありパワーもある事を再確認した。仲間がいるという幸せを子ども達にも伝えていけたらと思う。
- ・他の学科にはない「まとまり」や「団結力」などがあることをあらためて感じた。

③対談によりゼミ生が抱いた印象

- ・学生に華がある。学科の存在としては接点も多く身近に感じる。
- ・言葉に説得力を持つ学生が多い。
- ・使命感や義務感を強く持ち、すでに教員の雰囲気を持っている。
- ・団結力の現れかイベントなどへの参加者も多く、集団で行動しているイメージがある。

6) 人間福祉学科

①対談を通してゼミ生があらためて感じた当学科に対する印象

人間福祉学科の価値については、「バイステック原則」での表現が可能である。我々

学生は大学での勉強や現場実習を通して、「受容的態度」「共感的態度」「自己覚知」など社会福祉学を学ぶ者としての基本的態度が身についたのではないかと考える。様々な専門的知識の獲得や専門的経験を通し、入学以前に比べると自己の中に明らかな視野の広がりを感じる。

人間福祉学科の教育では、人を「高齢者」や「障害者」などに区別することなく、どのような状況に置かれる者も「ひとりの人」として考える姿勢を学んだ。高齢者施設や障害者施設へ現場実習に行っても、老若男女を問わず我々は利用者を「ひとりの人」として捉える視点を大切にすることができるようになった。これは入学当初の我々には欠けていた視点である。

現場実習に臨む際には実習目標を明らかにしながら、実習計画を立てた。実習中は実習担当者とフィードバックを行い、実習終了後は授業の中のグループワークでふり返りを行う。こうしたプロセスは、自己理解を深める良い機会となった。日常生活の中ではなかなか実現の難しいこうした体験は、専門職実習であることを差し引いても、人が成長していく上でとても重要であることを実感した。

我々は様々な人間関係の中で生きている。一人ひとりの相手とはそれぞれの心理的距離があり、その関係性も異なる。時間の経過と共に変化していく心理的距離感や関係性を常に感じながら我々は他者の中で関わっていく必要があることも学んだ。

障害の有無に関係なく、お金の有無に関係なく、老若男女を問わず、「福祉」は国民の生活に関することであると説明ができるようになった。「福祉は決して特別のものではない。どの人の生活にもかかわっていることなのだ。」と周りの人達に伝えていきたいと思う。

「福祉」を特別な領域のものとしてきた今までの自分から、こうして自らの生活領域の問題として「福祉」を身近なものとして捉える

ことができるようになると共に、等身大の自分を「それでいい」と受容できるようになったこともこの学問との出会いからであり、自分達自身の人生に大きな影響を与えてくれたことに感謝している。

②対談後、人間福祉学科に対し他学科協力学生が抱いた印象（対談後アンケートより）

a) 人間言語学科

- ・みんなまじめにいろんなことを考えているのだと感じた。
- ・少し「福祉」の勉強をしてみたくなった。
- ・自分があまり「福祉」というものを知らなかったためか、今回の機会を通して「福祉」の話や授業でどんなことを学び、またどのように社会にかかわろうとしているのかをもっと詳しく知りたくなった。

b) 人間文化学科

- ・人間福祉学科について知らないことも多く、もっと理解を深め合い、本学がより良い学校になるといいと思う。

c) 人間栄養学科

- ・人間福祉学科とは、一般教養の授業でもクラスが異なるため、寮生や元寮生以外にはほとんど知りません。そのため、今回の作業を通して人間福祉学科のことにについて知ることも多く、とても身近に感じるようになりました。

d) 心理学科

- ・人間福祉学科には「できる&おもしろい」イメージを持っていたが、イメージ以上にすごい感じがした。
- ・他者への配慮とか細かな部分への気付きがあり尊敬した。
- ・学科の活動も思っていた以上に大変そうだと話を聴くたびに「すごい」と思った。
- ・皆さん全員が広い視野で多角的に物事を捉えていたことに感心した。
- ・人間福祉学科の学生とはほんの数人しか付き合いがないため学科としてのイメー

ジがあいまいであったが、今回とても温かく迎えていただき、打ちとけやすい人たちがばかりだと感じた。

- ・ これまでは人間福祉学科に対するイメージとして、集団というものを大切に、強い意志を持って物事に取り組んで行くというイメージがあったが、それに加えて他者を受け入れ温かく迎えてくれる雰囲気もあることに気付いた。

e) 初等教育学科

- ・ 今回の会での率直な感想として、中村ゼミの人たちは、アイコンタクトを交わしながら話を途切れさすことなく、多くの話題に触れていったことをすばらしいと感じた。
- ・ 人間福祉学科は様々な学科の中でも最も近い存在だと感じていたので、こうして交流ができて嬉しかった。
- ・ あまり福祉のことは聞けなかったが、「人をありのまま受け止めることのできる人達だなあ」と感じた。それも人間福祉学科の専門性のひとつかなと思う。
- ・ 自分達の学科のカラーとの違いを感じた。

(2) 本学人間科学部での「学びの良さ」とは (対談後アンケートより)

a) 人間言語学科

- ・ 入学した当初は本学に来たことをとても後悔していたが、今回の話し合いを通して良い大学に来たことを実感した。
- ・ あらためてこの大学の良さを再確認できた内容であったと思う。学生がこうして充実した生活を送れているのも、やはり本学の先生や教育方針、取り組み姿勢が良いからであると思う。

b) 人間文化学科

- ・ 文教生はどの学科の人も本学に対して満足しているんだと感じた。
- ・ どの学科にも共通していることは、人と人との関わりの中でつくられる「もの」

「こと」であり、人がいないとどの学科も成り立たない学問であると思う。

- ・ 正直、本学へ入学してきて物足りなさを感じた時期もあったが、それだからこそ自分で何かを得ようという自立の心が大きく動き出したのも事実である。本学へ学びに来て本当によかったと思う。

c) 人間栄養学科

- ・ 当然ながら学科毎に独特のカラーがあると感じた。

d) 心理学科

- ・ 本学は先生と学生、学生同士の距離が近い大学であるように感じる。
- ・ 以前から温かい場所であると感じていたが、自分が最も気に入っていたのが「先生の存在」であることに気付いた。
- ・ 「心を育て、人を育てる」という教訓の通り、「心がきれいで温かい人たちに出会えたなあ」とあらためて思う。

e) 初等教育学科

- ・ 最近になって、四年生となり本学の良さを痛感している時でもあったので、今回の作業を通し同じ学科の子の思いを聞くことでさらにその気持ちが大きくなった。
- ・ みんな自分が「文教生」であることに誇りを持っていることと、「人」を根本にした学問を通して自分がどんな「人」になりたいのかを無意識に考えていける学校であると思う。

f) 人間福祉学科

どの学科に属する学生も皆一様に自らの学科に誇りと満足感を抱き、当学園が掲げる「人を育て、心を育てる」実践教育を受けてきたことを実感している。

学生同士や先生とのかかわりを通して、自分自身をみつめ、他者との関係性の中で自己の存在価値に気付くことができた。また、同じ目標に向かう仲間と切磋琢磨できたことで自分の将来が明確になっていった。授業だけでなく、サークル活動、大学祭、学

科独自のイベント、ボランティアやアルバイトなどの経験も自己の成長の手助けとなった。仲間や先生も自己の存在を受け止めてくれ、発言も保障してくれる。先生の側で自分達が活動できる環境を提供してくれる安心感があった。

単なる専門知識や専門技術の習得だけでなく、その根幹にある人間としての「倫理」「価値」「道徳」を養うことができた。

人間科学部とは、「人」を中核に据え、色々な面から人間を捉えていく学問の集まりであると思う。

## 2. 学科間交流の「意義」とは何か (対談後アンケートより)

### (1) 他学科協力学生から

#### a) 人間言語学科

- ・初対面でありながらも、堅苦しい雰囲気ではなく、あのようにフレンドリーに話ができただことは、私にとって新鮮な出来事でした。
- ・普段他学科との交流は少なく、今この時期に来て何を考え、これからの進路についてどのような見通しを持っているのか話をする機会がないので、人間福祉学科の皆さんとこうした機会を持ったことはとても貴重な時間であったと思う。
- ・入学当時の話をするとはなかったので、あらためて振り返ることにより、同じ学科の友人同士でも「そうだったのか」と思うことがいくつもあった。
- ・いつも一緒にいる友人たちと、本学や所属学科について意見を交わすことは大切であると思う。
- ・残り少ない学生生活、自らの学び舎である人間言語学科、そして広島文教女子大学という環境に感謝しつつ、最後までしっかりと楽しみながら勉強をしようと思います。
- ・今回の対談を通し、皆のお話を聞き、考

えたことや得たものがたくさんあった。それぞれが人間言語学科や人間福祉学科についての意見やポリシーを話す時の目はとてもキラキラしていて、こんな人たちと出会えた私はとても幸せであると感じた。

- ・話の後半では、「福祉について」というひとつのものを共有できたようで嬉しかった。「福祉」は人間言語学科にもつながりがあることをあらためて実感することができた。
  - ・抽象的ではあるが、何においても全てにはつながりがあるのではないかと思うようになった。(例：言語、世界、外国、福祉、障害、人間など)
  - ・最初はどのようなゼミで、どのような質問を受けるのか不安であったが、今回の交流会に参加して本当に意味のある会であったと感じた。
  - ・今回この会に参加させていただき、人に何かを伝えることは難しいなあと思いました。また、同時に他学科の方とこのような話し合いの場を持つことで意見交換ができ、学ぶものが多かったように思います。
  - ・人間言語学科についての質問を受けることによって、本学科の良さや個性を客観視することができた。また、自分が学んできたことや自分自身を見つめなおす機会にもなった。
- #### b) 人間文化学科
- ・大学では、他学科の人と交流できる機会が少ないので、今回参加できてとてもよかった。
  - ・同じ大学の生徒であっても、四年間の経験や学びの内容は異なるということを感じた。また、情報を共有しあうことは、お互いの学科を理解しあうことができ、すごく良い事であると思う。
  - ・今回この会に参加した他学科の人たちが

どのようなことを話したのかすごく気になった。

- ・四年生となった今、自分が学んできたこと、学びたかったことをあらためて考えることができた気がする。
- ・自分が所属する学科のことを口に出して人に伝える機会というのはほとんど無かったので、上手く伝えることができなかった気がする。しかし、こうやって他学科に伝える作業を通して、人間文化学科に対し新たな発見や興味を持っていただければ嬉しく思う。
- ・人間文化学科はなくなるが、「広島文教女子大学」の存在は永遠です。他学科や他学年のこうした交流会はもっと増やすべきだと思うし、他者に伝えることで自分の考えが明らかになることを今回の作業で発見できた。
- ・1～4年までが集結して、このような会ができれば素敵だと思う。

c) 人間栄養学科

- ・あまり縁のなかった人間福祉学科に対して、親近感を感じることができた。インタビューということであったので緊張していたが、楽しく話すことができた。
- ・他学科の学生に自分達の学科についての話をする中で、自分が四年間やってきたことをあらためて確認することができ、卒業後に本学で学んだことを下地にして自分がどう成長していけばよいのかを考えるきっかけになった。
- ・会に出席した者同士でも「えっ、そうなの」と思ったところも多くあり、久しぶりに新鮮な気分となった。

d) 心理学科

- ・すごく安心感がある中で会話ができて楽しかった。
- ・「もっと話したい」という気持ちになった。
- ・自分の学科についてあらためて考える機

会を持たせてくれてありがたく感じた。

- ・普段当たり前のように思っていたことを、相手に説明し納得させることの難しさを感じると共にこちらからも人間福祉学科の事を聞きたくなった。
- ・大学や学科に慣れすぎると、本学に対する疑問や関心が薄れがちになるが、今回の対談で興味を持つことと考えることの大切さについて学べたような気がする。
- ・これまでも他学科の友達と話したことはあったが、ここまで真剣に学科の話をする機会はなかったので、素晴らしい時間を過ごすことができたとと思う。
- ・自分自身というよりも、学科を代表しているという意識が出てきたところもあり、きちんと応えられたどうかは不安も残るが、「自分が所属する学科とはどんな所なのだろうか」と考えさせられた気がして嬉しく感じた。

e) 初等教育学科

- ・インタビューする人、される人を見て、質問内容の大切さに気づきました。話をどんどんしたくなるときや、逆に話しづらいとき等、質問内容で大きく異なると感じました。そして、インタビューする人のうなずきや笑顔は安心感を与えるものだ実感しました。このことは教師として活かしていかなければならないところです。
- ・自分が所属している学科や大学についてあらためて考える機会となった。なんとなく思いとしてあったものが、この交流で明確なものとなり、有意義な時間を過ごせた。
- ・私たちの意見に対しうなずいてくれたりしたのは嬉しかったが、「何か返さねば」と思って必死で応えてくれているようなぎこちなさを感じる場面があった。でもこの四年間を通じて他学科とこうした内容で交流する機会はなかったので面白

かった。

- ・あらためて自分が入学してきた時の気持ちを思い出したり、自分の中での本学に対するイメージの変化にも気付くことができた。

## (2) 人間福祉学科（ゼミ生）の立場から

インタビューという形式によるグループワークを通し、自分を客観的に捉えることができ、グループにおける個々の役割を認識することができた。また、インタビューをする側が一定の自己開示を行うことや、姿勢や視線などの非言語的コミュニケーションにも意識を向けることの重要性を実感することができた。

この活動を開始した当初のインタビューでは、沈黙したり会話の流れが横に反れることを恐れ、問いかけの仕方がぎこちなかった。しかし、都度グループで反省を繰り返し、テープ起こしの作業を通してインタビューのより良い形を模索していく中で、次第にさりげない形での問いかけや自然な流れの中でも話題の軌道修正が行えるゆとりが生まれてきた。

今回の作業は、人を介して自分をみつめ直す機会であり、またゼミ生全員が真のグループとしてのまとまりを形成する機会でもあり、さらに社会福祉援助技術という専門性の基盤を養う良い機会ともなった。

## Ⅲ 結論 ～実践研究活動に対する考察～

### 1. 交流活動の意義

#### (1) 「聴く」技術の重要性を実感する場として

他者に対し自らの考えを述べることは、自己の真の思いに気付くためには大切な作業である。頭の中でわかっているつもりでも、いざ言葉として表現する際には上手く表現できなかつたり、逆に言葉で表現することで自分が意識していなかった本心に気付くことができる。

今回の作業に対し、ゼミ生たちは他学科の協力学生が思いを表出しやすい様にかなり用意周

到な準備をすすめ、応答技法を活用しながら対談を行っている。しかし意識はしていても人の話を「聴く」ことに慣れていない為、作品が軌道に乗るまでには時間を要し、ゼミ生側としては「聴く」技術の難しさを実感したようであるが、しかし多くの協力学生からの「話しやすかった」「居心地が良かった」という感想を読む上では、「聴く」姿勢に徹した効果は結果として現れていたものと思われる。

このようにゼミ生たちは、対人援助における関係作りのプロセスを身を持って体験し、「聴く」技術の重要性を実感したのである。

#### (2) 繰り返ることの有効性を実感する場として

本作業は単なる他学科との交流会などではない。ひとつの学科との対談には、①ゼミ生同士による事前の打ち合わせ、②対談後の反省会、③テープ起こし、④アンケートの集計、⑤各学科に関する話し合いのまとめ、といったような流れが繰り返されている。彼女達は多くの時間をこの繰り返りの作業に費やしているのである。繰り返りの作業によって明らかとなった課題を一つひとつ克服し、対談をできるだけ効果的で有意義なものにしていくための検討作業を行う中で、彼女たちは多くのことに気付き、徐々に実践研究活動を熟成させていったといえる。

ゼミ生のコメントにもあったが、担当教員の側から見ても、初回と最終の対談内容の質及び会場の雰囲気の違いは歴然としている。これは単なる「慣れ」からくる余裕が要因などではなく、社会福祉を学ぶ専門家としての彼女達の「自覚」によるものであることを確信する。特にテープ起こしの際に経験する自らに対する客観的視線は、彼女達に多くの気付きを与えることとなった。

単に作業をこなすのではなく、その行為を繰り返りながら次へとつなげていくプロセスこそが、こうした作業の旨味であり大きな意義であるといえる。

### (3) グループとしての成長の場として

各々のゼミ（専門演習）には様々な演習内容や活動形態があろうが、当ゼミにおいてはこれまで週に一度の勉強会の集まりにしか過ぎなかった。換言すれば講義の延長であり、ゼミ生同士も上辺の関係で済ませることができていたのである。しかし、本実践研究活動を行うことは、ゼミ生たち自身が目的を同じくするひとつのグループでなければならないことを意味していた。つまり「チームワーク」と「本音のぶつかり合い」が前提条件となっていたのである。

案の定、これまでは上辺の関係だけで済ませることができていたものが、実際に活動を始め共有する時間を増すほどにメンバー間の「思い」や「考え方」、「行動スタイル」などに違いが表出し始め、正直担当教員の介入が必要とされる状況の直前までゼミ生たちは互いの関係にストレスを抱えていった。

しかし、そのように互いが疲弊した状況に陥りながらも、時間的経過と共に個々のメンバーは次第にこれまでの自己の行動パターンを見直す作業を始め、価値観の異なる他者を受容し、再びひとつのグループとしての活動を再開し始めていったのである。

「価値の衝突を越え、互いの真の理解へ」というグループとしての成長は、当のゼミ生たちにとっては決して容易なプロセスではなかったはずである。しかし、それを乗り越えた先にはグループとしての熟成とメンバー個々の成長がもたらされるといった「グループワークの効果」を、ゼミ生たちは本実践研究活動を通して実感してくれたはずである。

グループワークに関するこうした貴重な体験を、福祉現場における彼女達の今後の実践活動に活かしてくれたら幸いである。

## 2. 本学人間科学部の「学びの良さ」とは

本実践研究活動を当ゼミにおいて展開する上で、担当教員としてはある意味リスクを伴っていたといえる。本学のユーザーである学部生達

が、果たして本学が掲げる「心を育て、人を育てる」という教育理念を真に評価してくれているのかどうか、あるいは本学に対するネガティブな発言があった場合にどのような対処をすればよいか等、正直なところ担当教員として不安要素を抱えながらのスタートであった。しかし、ふたを開いてみるとそうした不安は杞憂に終わり、本論で紹介したような多くの肯定的なコメントが交わされ、あらためて本学の教育理念の偉大さと、その理念に基づかれた教育実践者の一人であることに幸せをかみしめることのできる結果となった。

ここでは、対談で交わされた内容の中で、特筆すべきキーワードについて三点ほど触れておく。

### (1) 挫折からの出発

正直な話、本学へ入学してくる学生達は、その入学に本意でなかった者も多い。AO入試や推薦入試で入学してくる学生達以外は、第一志望校が不合格となり、そこで大きな挫折感を味わい、たどり着いた先が本学であるという者達が存在している。それはどの学科においてもほぼ同じ状況にある。そのため入学時には学習意欲を喪失している者、目標を見失い投げやりとなっている者、退学することを検討する者など様々であるという。

こうした自尊心を傷つけられ自信を失った彼女達に、本学は優しくゆっくりと時間をかけてその傷を癒していくのである。「あの時（入学時）は大学を辞めようかとずいぶん悩んだが、今思うと本学に来て本当に良かった」「もっと本学の価値を周りの人に知ってもらいたい」等実感を伴って発言する彼女達の言葉は決して偽りなどではなかった。その真の言葉を耳にして、対談に同席していた担当教員の胸に何度も熱いものが込み上げてきた。

挫折体験は、捉え方次第でその後の人生に大きな力となってくれるものである。挫折体験を味わいながらも、今ではそのことを受容し事実

を肯定的に捉え、目標に向かっていきいきと生活を送る彼女達を見ていると、本学の果たす役割と責任、及び本学の持つその偉大なる力を実感せずにはいられないのである。

## (2) 教員の存在の大きさ

どの学科からも一様に聞こえてきたフレーズがある。「本学の一番の売りは先生たち」「先生にはなんでも相談できる」「先生との距離は本当に近い」「今の自分があるのは先生のおかげ」等である。しかも一番多く聞かれたフレーズである。教員の存在は前述の項目にも大きく貢献していると考えられるが、学生の側からあらためてこうした声上がるのはありがたい限りである。

彼女たちに対する「教育」や「かかわり」を最優先させる本学の姿勢は、これからも継続していくべきであるし、この姿勢こそが本学の生命線（ライフライン）であるともいえる。喜ばしい評価ではあるが、だからこそ「彼女達の期待は決して裏切ることがあってはならない」という大きな責任を感じ、自らの教育姿勢を振り返らなければならないとも思う。

## (3) 人間文化学科について

時代の流れによる結果であるとはいえ、人間文化学科が今年度最終学年を送り出すことになったのは、本当に残念な限りである。しかし、人間文化学科の協力学生達はその学問に誇りを持ち、自らの芸術表現に妥協を許さない「芸術家魂」を対談における発言の中で常に垣間見せていた。人間文化学科の価値が最終学年の学生達には確実に浸透していることを確認できたことは、我々としても嬉しい限りである。

## 3. 最 後 に

大学再編により誕生した人間科学部六学科全ての学生達と今回あらためて交流を持てたこと、そして学科固有の専門性を併せ持ちながらも、創設者武田ミキ先生の掲げる「育心・育人」の

教育理念が確実に全学科の学生達の心に届いていることを確認できたことは、本実践研究活動の存在価値であり大きな収穫であると自負している。

ここに体现された六学科共通の価値としての「学びのよさ」を大切にしながら、我々教員は「育心・育人」教育に今後も真摯な態度で臨んでいかなければならない。

ゼミ生にとっては、就職活動や国家試験の受験勉強など多様な人生課題を抱える時期において、本作業に取り組むことは大変な苦勞を伴ったはずである。にもかかわらず、本作業を自己の成長のためであると前向きに捉え、担当教員の指導を誠実に受け止めながら、本実践研究を形にしてくれたことに心から感謝すると共に、このメンバーだからこそできた作業であることを実感し、彼女たちの成長を頼もしく感じているところである。

最後に、本実践研究活動にご理解をいただいた各学科長の先生方、及び対談に快く臨んでいただいた他学科四年生の皆様に心より感謝を申し上げます、本実践研究活動の報告をここで締めくくりにする。

### 執 筆 担 当

I. 序 論	中村卓治
II. 本 論	ゼミ生
III. 結 論	中村卓治
監 修	中村卓治

### 協 力 学 生

人間言語学科：	井上真友子、杉本 淳美 浅岡 由貴、上田 裕子
人間文化学科：	石本 理恵、岡本 舞 河村 朋美
人間栄養学科：	坂井 佳美、木山 幸美
心理学科：	窪園 由夏、木本明日香 平原明日香
初等教育学科：	田中 陽子、川原 祥子 宮崎 尚子、近藤 春奈

参 考 文 献

広島文教女子大学「平成18年度 広島文教女子大学 自己評価報告書」2006年

植田寿之「対人援助のスーパービジョン —よりよい援助関係を築くために」中央法規出版 2005年

東山紘久「プロカウンセラーの聞く技術」創元社 2000年

社会福祉法人奈良県社会福祉協議会 編「ワーカーを育てるスーパービジョン よい援助関係をめざす

ワーカートレーニング」中央法規 2000年

中村卓治「東広島精神保健福祉ボランティア講座 —ステップアップ編—テキスト」東広島精神保健福祉ボランティア講座実行委員会 2006年

※協力学生から得た情報に関しては、個人が特定されないような文中活用に努め、完成原稿に関しても協力学生の承認を得た上で仕上げたことをここに報告する。